

滿蒙雜感

太田隆賢

滿洲産業建設學徒研究團に参加し、滿洲の曠野に飛出し南は旅順大連より高粱の渺々たる平野を縫ふて萬里の長城を超へ北支那を覗き熱河に境し駱駝の群れ、驢馬の異様な嘶聲を聞き朝日が曠漠たる地平線より昇り地平線に没する赫い夕陽の沃野千里、或は無味荒寥黃塵萬丈の沙漠蒙古に入り、十字架の金色を優麗のなかに輝かせて祈の鐘は餘韻嫋々ミ大陸の果にかぎりなく響き、ロシア音楽、哈爾賓の異國情緒に酔ながら新興滿洲國の黎明を裝る帝都新京を訪れ三詢の視察を了へたのです。思ふに東亞の一島國日本は天然の資源に乏しい、而も人口は加速度的に膨脹しつつある。之の乏しい資源ミこの膨脹して止まぬ人口の捌口を何處に求むべきであらうか、このまゝに推移して行くミするなばらば一億の日本國民は唯だ坐して死を待つより道はありませんまい。米國は日本人に對して日本移民禁^{リット}りの立札を掲げ、そして今又ブラジルに日本移民排斥の烽火を見る、四面楚歌の日本、生死の巖頭に立つて居る日本人はさて何處に行くべきでありましょう、それは歴史的にて宿命的にて不即不離の關係に在る豐饒な大陸滿洲に於てその生命を培ふべきである。九萬二千方里の廣茅ミ豊かな天然資源に恵まれた大滿洲ミ提携し之處に兩國共存共榮の王道樂土を建設すべきである、此の目ざす王道樂土の建設こそ我々日本人の希求してやまぬ永遠の東洋平和を意味するのである、是れぞ先輩同胞の忘れ形見であり、同胞流血の聖地滿洲に對する今日の我々日本人に與えられた義務ではなからうか。然乍是處に一考を要する點が存在する、即ち大和民族性ミ滿洲國々民性である、日本人は幾千年來萬世一系の大君を戴き慈父ミ仰ぎ奉て來た大家族國家に育てられ、従つて國家觀念強く義勇に富み清き明るき仲良き國民である。然るに滿洲人・支那人は永らく軍閥

專制政治の下で膏血をしほられ、國家に對する反感はやがて彼等をして個人主義、經濟主義の人種に導いたのであらう。此の現實利己主義が偽信或は迷信を數限りなく存在せしめ日本佛教の様な高等な理智的な信仰を缺乏せしめたのである。今更述べるまでもないが人生の凡ゆる活動の完成の爲に宗教信念は缺く可からざる物であつて、信仰なき人間、信仰なき國民は人生々活に於て失敗を蒙らなければならないのである。日本は民族融和及び共存共榮を目的として滿洲と親密な政治經濟關係を結んできて居る、然し幾千年來の人類歴史が證明して居る様に單なる政治ならびに經濟關係は永續性をもたないのである、遅かれ早かれ利害の衝突から兩國國民が離間し互に敵愾心をもつ事は免れぬ事實であらう。それに反して精神的結合、即ち宗教的結合は永續する可能性を多分に持つ事を信するのである、故に日滿兩國が完全な融和實現の爲には政治家或は實業家の活躍も結構である、然し我等宗教家が滿洲に行つて活躍すべき事を痛感したのである。

私等が旅行中滿洲の神社佛寺に參拜し參詣者を見るに殆んご内地人ばかりである、之れは何處に歸因するか、それは我等日本人が語學が不得手で彼等民族に其の宗教の眞髓を理解せしむる事が出来ないからであらう。滿洲の宗教史をひもぎ見るに高麗の時西域の僧を招聘され滿洲に初めて佛教が弘められ、其後渤海・遼の時代に至つては佛寺を建立し僧侶を厚遇されて居る處より見れば滿洲人にも佛法を説き日本佛教を理解させ信仰をもたせる事は決して不可能ではない、我等日本の佛教家に依つてのみ眞の日滿親善及び兩國間の融和が徹底される確信を持つのである、故に我等日本宗教家滿洲に於て大いに努力活動する事は我等に今日與へられた最大使命でなからうか。擬て此處に於て滿蒙民族間に信仰されて居る代表的宗教を一瞥せん、そは道教・儒教・回教・喇嘛教ならびに在裡教等である、又道院・紅卍字會云ふ宗教團體がある、其の教旨は至聖先天老祖を祭つたものであり、至聖先天老祖云ふのは基督教・回教・儒教・佛教・道教の五教の神祖を本尊として居るのであり、之の五教の眞諦を貫徹し大道を闡明することを宗旨として民族及び國境を超越して社會的慈善事業を盛に行つて居り、滿洲の地方の富豪及び知識階級者等に悉く關係を持ち縣知事階級

者は殆んどあつて一大勢力を持つ宗團である。儒教は云ふまでもなく孔子の教に基き有識の人々の間に盛んで滿洲建國と共に國教として之が布衍に當つて居る。回教は教祖マホメットの教を根據として又滿洲の各地に寺院を建立して多數の教徒をもち、彼等教徒は一切豚肉を喰はず支那人料理屋の食物を口にせず全々別個の社會を形成し同教徒間の團結は驚くべき強固なものであり、曆も支那曆を使はず彼等仲間の正月は舊曆の九月の初旬に始り毎土曜日には必ず禮拜堂に參詣して天帝アラアを拜する外一切の偶像を邪物視する熱烈なる唯神信者で、彼等は概して都會に多く住み門前には回教の門標が吊してあるのを見受けるのである。又在理教は教旨は甚だ曖昧であり、佛教・道教・儒教の三教を渾然融和した様なもので因果應報と拔苦與樂を説き正身修身、克己復禮を本として兎に角ごんな事にでも堪へる云ふ事を中心として居り、教徒は禁酒禁煙を習ひて觀世音菩薩と老子と孔子の三聖の像を祀り信仰對象とし滿洲のそ信徒數は約三十萬程あり。次に蒙古地方に一大勢力を有する宗教は彼の喇嘛教である喇嘛教は元來大乘佛教を本位とし眞言の密教の系統に屬して居り、教旨は貪慾惡行を慎み善行なし忍耐苦行巡禮祈念布施念佛を専心に努め之によつて罪業を贖ひ成佛して輪廻轉生の苦を脱れ様とするのであつて、信者は「オンマニベタメホン」乃ち南無阿彌陀佛々々々々々々口に唱へ正統の喇嘛寺は本尊は阿彌陀如來である。然し厄介なこゝには小乗佛教が西藏及び蒙古人間に傳はつた時に印度在來の瑜迦の濕婆神信仰も一緒に傳來し、生殖神崇拜と奇々怪々のグロテスク極まる鬼神夜叉の偶像に對する熱烈なる信仰と共に眞言秘密の幻術も傳り、更に原始的シャーマン信仰が之れに追加されたものであるから現在のラマは最も複雑醜惡なるものである。然らばその喇嘛教は何故に之の様に大勢力をもつ様になつたかそれには大きな一つの原因がある、清室は蒙古人の勢力を去らしめる手段の一つとして喇嘛教政策をとり此れを蒙古人に強いたのである、教古人はこれに旨く引かゝつたのである。従つて

(一) 多數の獨身喇嘛を生じ、蒙古人の人口増殖を制した。

(ロ) 元來は勸善懲惡の意味で創造せられたものが淫猥なる偶像崇拜となり、蒙古人の風教を害した。

(ハ) 人を殺すことを罪惡とする思想より蒙古人の殺伐心を殺した。

斯様な結果を得たが然れども宗教はなんぞ云つても宗教である、茲に自然に信仰が起り尊敬する喇嘛の爲には生命を捧げようぞ云ふ者が出て來た、其處で政教一致、即ち王侯が喇嘛たることを禁じた、是れは王侯の勢力擴大を恐れたからである。斯くの如く喇嘛教は恰も阿片の如く蒙古人を害したが、今は喇嘛教なくしては彼等は生活が出来ぬ、この儘に放置するならば毒は全身を害することになるだらう、此の弱點を看破してソヴィエト露國は蒙古の青年に新教育を授け喇嘛教の迷信を打破し僅か二、三年の間に外蒙古を赤化し尠大なる地域を露領にして仕舞いつゝある、然し彼等蒙古人は我等日本人によく相似し日本人に大變好意をよせて居るのである、蒙古の軍官學校の生徒に會つた時にも我が國歌「君が代」を合唱して我等を歡迎してくれて居るではないか、さうしてこのなつかしき蒙古人を之の苦澁をなめあへいで居る蒙古を見捨てられよう。此處に於て我々大乘佛教徒は先ず喇嘛教改革運動に乘出し之れによりて彼等蒙古人を救ひ善導し、日蒙親善の基礎を定める事こそ最大急務である、日本大本教が此の運動に進出して居るが併し清淨無垢な運動にあらざる故にあまり功を奏して居らず、たゞ之の大事業を待つべきは日本大乘佛教徒である。さうか諸兄が法を擴め蒙古を救はん爲に蒙古の沙漠で骨を埋める覺悟で進出されん事を希ふのである。

次にキリスト教の滿洲に於ける傳道狀態を見るに佛教の布教狀態と對比する時に其れに適する言を知らざる程滿洲至る處の様な北滿の寒村にも十字架の尖塔の聳へるのを見るのである、之れはチ、ハル滯在中に耳にした話なれどその都市の住民の滿洲人約八割に迄キリスト教は喰入つて居るさうである。その原因は一は彼等外人の豊富な財源、外人牧師の彼等滿人に對する阿片の供與に歸因するのである、然し彼等牧師の熱心努力も忽諸すべきではない、之等キリスト教はたゞ信仰的に結ばれたのでなくたゞ滿人の利己心が彼等外人によりて満足せしめられて居るだけで利害關係がなく

なればすぐ解けるであらう。キリスト教に次で日本の新興教團、大本教・金光教・天理教・人の道教團等も現世利益の信仰をもつて盛に教線網を張つて居る、之等も見のがすべからざるものである。されば日本佛教は云ふに各宗共に滿蒙には進出はして居るが其の規模小にして殆んご在留邦人相手の布教である、されど眞宗などの發展狀態は非常に顯著なものである、然れば淨土宗の滿蒙に於ける教線擴張の狀態は云ふにキリスト教等と比較すれば其の規模又其の數に於ても大變な遜色を見るが、我等の先輩諸師が非常に我が宗門の爲又一は滿洲國の健全な發育の爲に日夜奮勵されて居る事は私ども後輩の痛く感謝する處である。現代の淨土宗の布教狀態は個人分散主義で淨土宗の宗團的活動はされて居らないのである。之れが不振の一大原因でなからうかと思ふのである。私共が新興滿洲國の黎明を裝る帝都新京を訪れ約三日間滞在して居り天を開き地を開く國都の大建設は本春の解氷期より一齊に開始され、今まさにこの様な國都が出来るだらうか衆目環視の中に國都は今確實な歩を運んで居る、之の建設途上の市街を見る時日本佛教各宗ならびに新興教團はこぞつて大敷地の永久商租權を獲得して居るではないか、そして之の地に滿洲布教の中心を建設せられて居るのである。然るに淨土宗は斯様な活動には宗務當局が無感心な様な噂を新京滞在中耳にした、斯くて實際現地を見てくるこそれがうなづかれるのである。然し大伽藍、大殿堂が造られずとも宗祖法然上人は七百五十年の古に「あまを一廟にしむれば遺法あまねからず予が遺跡は諸洲に遍滿すべし念佛の聲する所それ皆我が遺跡なり」と或は「我たこへ死刑に行はるこそ之の事云はずばあるべからず。」と絶叫されて居るではないか、この吉水の流を汲む我等青年宗侶が其の宗祖の叫びを燃へるが如き熱さを耳底におさめ膽に銘じて滿洲の地に於て布教し、たゞへ餓死せようとも念佛の法を弘めん爲には満足であらう。然し滿洲の地は決して眞劍なる者は餓死せしめない、斯る眞劍な態度で諸兄等が滿洲に進出するならば一は滿洲國の健全な發達の爲、一は祖國日本の爲、引いては宗門の爲である、此處に於て諸兄の滿洲に進出されん事を切に望むのである。

最後に霖雨降りしきる北滿の曠野に、或は長城線の確保に東洋永遠の平和希求して献身的努力を傾倒さる我が皇軍將士に對して萬腔の感謝を表す。